妙陵

妙高市立妙高中学校
学校だより　第２９号
平成２６年１２月１５日
携帯電話用QRｺｰﾄﾞ →

大好き妙高！　～故郷（ふるさと）を大切にする気持ちを～

校長　鈴木　恒夫

◆**「大好き妙高」**･･･「ざぶん賞」（水に関する作文コンクール）に入賞した３年女子の作文の題名です。「私の街には、自然がたくさんあります。」という書き出しで、温泉やスキー場、豊富な雪解け水によるおいしい作物など、妙高の自然の素晴らしさが素直な文章で綴られていました。

右のイラストは、切り絵作家の浅見祥子さんが、文章のイメージを表現したものです。お米やトマト、キノコなど、豊かな自然の恵みが描かれています。

イラスト　浅見祥子

◆今年の秋、**「東京新潟県人会」**から会報誌「新潟縣人」1月号に妙高中学校を特集するので紹介文を書いてくれという依頼がありました。下がその会報誌の表紙と特集の最初のページのイメージです。竹の子狩り遠足や妙高登山等、特色ある活動を中心に生徒の活躍の様子を紹介しました。

最後のページは、3人の卒業生（統合前の学校を含む）による「思い出」のページでした。印象に残った内容を紹介します。

「新潟縣人」27年1月号

- 一つの校舎（四ツ屋校舎）に2つの中学校（原通中と大鹿中）が同居していた。校長も先生も生徒会長も別なのに生徒は混合だった。
- 家から7kmの道（大半が坂道）を朝6時30分に家を出て1時間半かけて毎日通った。冬場は通えないため、12月から3月まで寄宿舎生活をした。
- 校庭で仲間と弁当を食べていた時、大きな地震（新潟地震）が起こり、グラウンドが音を立ててひび割れした。とても怖い経験だった。

「へぇ～そんなことが･･･」という内容で、とても興味深く拝見しました。3人は共通して「中学校時代の経験が今の自分の土台になっている。」という意味の内容を書いていました。「校門前からの妙高山の雄姿は今でも故郷（ふるさと）の原風景です。」という一文も印象に残りました。母校を愛する気持ち、自分の育った故郷（ふるさと）を大切にする気持ちが感じられます。

◆12月7日（日）、市Ｐ連の主催で**「社会全体で子どもをはぐくむつどいin妙高」**という研究大会が行われました。3つの小学校区で進めている地域と学校が連携した取組が紹介されました。「故郷（ふるさと）を大切にする気持ち」は、地域の中での豊かな体験を通してはぐくまれるものです。近年、生活が便利になり、地域内の「絆」が薄れてきている中、学校･家庭･地域が連携して、意識的に取り組んでいく必要があると改めて感じました。